
放課後のミルクティー

まどろむ黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後のミルクティー

【Nコード】

N7617P

【作者名】

まどろむ黒猫

【あらすじ】

いつも通りの日々をすごしていた陸上部所属中学二年坂上昴。そのいつも通りの日々に割り込んできた自称卒業生の井上美咲。「よし！！私がすばるんのコーチになってやろう！！」
この先輩についていって果たしてタイムは伸びるのか！！??

始まりのティータイム

今僕は電車の中にいる。

幾度となく電車を乗り換え、今に至る。

あの人に会いに行くために。

今もまだ忘れられないあの人に会いに行くために。

あの人との出会いはそう、中学二年の冬だった。

最近、地球温暖化など関係無いとばかりに
凍りつくような日々が続いていて、それは今日も例外ではなかった。

2

今はちょうど、部活動に所属している部員達が
帰り終わった時間帯で、グラウンドは静寂に包まれている。

僕はこの時間帯に陸上の自主トレーニングをするのが日課となっていた。

この時間帯はグラウンドに人がいることはほとんど無く、
いたとしても帰り支度の遅くなった人が一人か二人残っている程度
なので、
誰かに邪魔をされる心配がないし、何より静かで集中しやすいからだ。

軽いジョギングから始め、ストレッチをし、五〜六キロぐらいの距離を走る。

トレーニング中は走ることを考える。

残りの距離を考え、どのタイミングでスパートをかけるのか？
足幅は十分か？腕の振りは最小限に。

とにかく、自分の走りのことだけを考えて走る。

走り終わり地面に座り込むと、ふと朝礼台にある人影に気づく。

この時間帯に人がいることは珍しく、つい人影の方を見てしまう。
すると、人影がこっちに近づいて来て、こっちに何か放ってくる。
放られたものが何なのか分からず、一瞬身構えてしまったが、
それは暖かいミルクティーだった。

「お疲れ〜。こんな時間に自主練とは努力家だね〜。あ、ソレ差し入れね。」

そこには一人の少女が立っていた。

長く綺麗な黒髪に、高めの身長、かなり整った顔立ちで
絵に描いたように綺麗なその姿について見とれてしまう。

「どうした少年？私に見とれてしまったかい？」

小悪魔のような笑顔でニヤリとした少女が言う。

「見とれてなんかいません。ただこんな時間に人がいることに驚いただけです。」

ぶっきらぼうに言う。

「なんだ少年、素直じゃないなあ。ところで名前は？」
少女が尋ねる。

「坂上 昴です。そもそもあなた何者なんですか？」

「あたしは井上 美咲。まあ、この卒業生みたいなものかな？
そういえばミルクティーのお礼がまだだけど？」

少女が意地悪く言う。

「ミルクティーって美味しいんですか？僕飲んだことないんですよ。
ね。」

すると先輩が長々と語り始める。時間にして約十分……。

「ああ、ミルクティーの美味しさを知らないなんて、
なんて悲惨な人生を送ってきたのかしら！！
あの甘みに上品な香りそれから（以下略）
っていうか、いらなら返しなさいよ！！」

「いいえ、いただきます。」

ふくれつつらな先輩を横目に蓋を開けミルクティーを飲む。

初めて飲んだミルクティーはとても美味しかった。
話を聞かされているうちに、冷えてしまった体をゆっくりと暖めて
いく。

あまりの美味しさに顔が緩んでいたようで、先輩は満足げな顔をし

ている。

「ふふふ、これがミルクティーの魔力なのだよ!!」

なんだかとっても、誇らしげな顔をしている。

そんな子供のようにコロコロ表情の変わる先輩を見てつい笑ってしまふ。

「何？何で笑ってるの？」

先輩は、なぜ笑っているのか分からないといった様子だ。

「感情表現が豊かだったからですよ。」

あえて、子供っぽいということは言わずにおいた。

先輩はまだ納得できないといった様子だったが、まあいつか。と、あきらめた。
結構大雑把な性格のようだ。

「ところで、すばるんはいつもあの練習してんの？」

先輩が尋ねる。

「そうですね？ってというか、すばるんはやめてください。」

なんだよすばるんって……。

「すばるんの種目は？」

呼び方を変える気はさらさらないので、僕の願いはガン無視されている。

「三千メートルですけど……。」

先輩はなにやら考えこんでいる。

そろそろ声をかけようかと思ったところで、ふいに顔を上げる。

「よしっ！！私がすばるんのコーチになってやろうっ！！」

いきなり突拍子の無いことを言い始める先輩。

「……は？いやいやいやなんで、

僕が会ったばかりの人に指導されなきゃならないんですか？」

すごい勢いでパニくる僕。

「細かいこと気にしてちゃだめだよ！！大物になれないぞ」

肩に手を置いてくる先輩。

「ぜんぜん細かくないですから！！それに僕大会近いんでそんな無駄なことしてられません！！」

先輩がずいっと顔を近づけてくる。

「じゃあ、ごうしましょう。」

もし、私の指導でタイムが上がるできなかったら、

何でもあなたの言うことを聞いてあげる。

そのかわり、タイムに急激な伸びが出たら
あたしの言うことを何でも聞くこと。
これでいい?」

「何にもよくないですから!」

「文句ばかり、これだから最近の若者は・・・。」

ため息までついてやがる・・・。

「年がほとんど変わらない上に、何も間違ったこととは言っていないと
思うんですけどねえ!」

「おお、現代のすぐキレル若者!」

「・・・。。。」

もう突っ込むのも疲れてしまった。

「マジで私にまかせてくんないかなあ?ほんつとに。お願い。」

急に真面目な顔をする先輩。

ずるいと思った。

さっきまであんなにふざけてたのに、
急にこんな真面目な顔をされたら、こっちとしてはたまったもんじゃない。
やない。

「・・・はあ、もう・・・分かりましたよ・・・。勝手にしてください

さい。」

すると先輩はひまわりのような笑顔を浮かべる。

「やった！！ふふふ！！はじめからそういえばいいのよ！！」

むちゃくちゃ喜んでいらっしやる。

「じゃ、改めてよろしくすばるん！！私のことはマイハニーとでも呼んでくれたまえ！！」

「わかったよ、マイハニー。」

軽いノリで言ってみた。

「うわぁ、ほんとに言っちゃったよこの人……。」

なんか全力で引かれたし……。

「軽いノリですよ！！てかも先輩でいいですよね！！」

完璧に滑って顔が真っ赤な僕。

「んじゃ、よろしくねすばるん！！」

先輩が手を差し出してくる。

「よろしくお願いします、先輩。」

差し出された手を握る僕。

「いきなり手を握るなんて、すばるんはプレイボーイだなあ。」

「先輩が手を差し出してきたからでしょうが!!!!!!」

こうして僕と先輩のわけの分からない関係が始まったのだった。

こんなんでほんとに大丈夫なのかなあ……。

始まりのティータイム（後書き）

多少キツくてもいいんでアドバイスもらえるとうれしいです。
友達に注意され、行間直しておきました！！
なんかほんと、すいません・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7617p/>

放課後のミルクティー

2011年5月14日17時31分発行